

49. 炎症性腸疾患に対する高気圧酸素治療の使用経験

久米恵一郎 大槻 眞

(産業医科大学第3内科)

【目的】炎症性腸疾患の多くは厚生労働省の特定疾患に指定され、一定の治療指針が定められているものの治療抵抗性を示す症例が多く、各施設で様々な治療の工夫が凝らされている。最近、当科では侵襲の極めて少ない高気圧酸素(HBO)治療を難治性の炎症性腸疾患に対して使用し、好成績を収めたので報告する。

【対象・方法】炎症性腸疾患6例(潰瘍性大腸炎1例、クローン病2例、腸管ペーチェット病1例、放射線性腸炎2例)に対してHBO2.5 atm, 60 minで週5日間を4週、計20回を1クールとして1~2クール実施した。

【結果】潰瘍性大腸炎1例と腸管ペーチェット病1例は、高用量のステロイド剤で治療を開始したが出血もしくは腹痛を伴う腸潰瘍が難治性を示したためHBOを併用したところ潰瘍は癒着化しステロイドは減量可能となった。クローン病2例は高カロリー輸液下で瘻孔閉鎖目的にて使用したが1例のみに有効であった。放射線性腸炎は、1例は持続性出血を伴う難治性腸潰瘍に対し、もう1例は持続性出血を伴う新生血管に対しアルゴンプラズマによる凝固術施行後に出現した難治性腸潰瘍に対して使用し、いずれも奏効した。

【結語・考案】HBOの腸管の潰瘍に対する作用としては①低酸素状態を改善することにより腸管壁の血液循環を改善する、②潰瘍面の酸素分圧を高めることにより線維芽細胞の増殖や血管新生を助け治癒や組織再生を促進する等の効果が考えられているが、当科では治療指針に示されるステロイド治療に抵抗性を示した2例を含め難治性腸潰瘍4例全例に奏効した。クローン病では痔瘻等の肛門病変に有効であることは知られていたが、当科では腸管皮膚瘻に有効であった。以上より、HBOは炎症性腸疾患の難治性腸潰瘍や瘻孔病変に有効であると考えられた。

50. 糖尿病性および特発性外眼筋麻痺に対する高気圧酸素治療の有効性の検討

鈴木ひろみ*1) 今井 明*1) 塚原訓子*2)

(*1) 栃木県済生会宇都宮病院神経内科

(*2) 同 中央検査部

【目的】糖尿病性および特発性外眼筋麻痺に対する高気圧酸素治療(Hyperbaric oxygen therapy 以下HBO)の有効性を検討する。

【方法】糖尿病性外眼筋麻痺とは、糖尿病の診断手順(日本糖尿病学会,1999年)に従い糖尿病と診断した症例とした。特発性外眼筋麻痺とは、頭蓋内病変、重症筋無力症、外傷、先天性、代謝性、Fisher症候群などを否定でき原因が明らかでないものとした。糖尿病性および特発性外眼筋麻痺23名を対象に、第一種装置(純酸素加圧)にて2絶対気圧1時間を1回とし、HBOを2~26回施行。HBO開始から複視消失までの日数、複視発症から消失までの全経過日数などについて検討した。

【結果】糖尿病性外眼筋麻痺12名(平均60.2歳)ではHBO開始から複視消失までの日数は5~60日で、平均31.5日であった。複視発症から消失までの全経過日数は28~103日で、平均61.1日であった。特発性外眼筋麻痺11名(平均65.5歳)ではHBO開始から複視消失まで2~48日で、平均24.2日であった。全経過日数は23~113日で、平均59.3日であった。糖尿病性および特発性外眼筋麻痺の合計23名ではHBO開始から複視消失まで2~60日で、平均28.0日であった。全経過日数は23~113日で、平均60.2日であった。

【結論】糖尿病性および特発性外眼筋麻痺に対してHBOを施行し2~60日、平均28日で複視の消失を認めた。糖尿病性外眼筋麻痺の自然治癒は約100日との報告が多いが、今回の検討では、平均61.1日であり、HBOにより治癒期間が短縮できた。また、特発性外眼筋麻痺は治癒しない例もあると報告されているが、今回の検討では、全例が治癒した。

外眼筋麻痺に対してHBOは有効と考えられた。